

平成30年度

宇都宮大学教育学部私費外国人留学生入試 試験問題

小論文

教育学部学校教育教員養成課程教科文系社会分野

平成30年1月23日(火)

9:00~10:00

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけない。
2. 「受験番号」は、解答用紙の受験番号欄に忘れずに記入すること。
3. この冊子には、1問がある。乱丁、落丁、印刷不鮮明の個所があった場合には申し出ること。
4. 解答用紙は、2枚ある。解答は、必ず解答用紙の所定の解答欄に記入すること。所定の欄以外に記入したものは、無効である。

第1問

次の文章を読み、この文章に反論する形で文章を書いてほしい。(字数800字以内)

なお形式としては

- 1 主題 (あなたの主張)
- 2 相手の論点の要約
- 3 相手の論点について認められるところ
- 4 相手の論点に対する反駁とその根拠
- 5 4に基づくあなたの主張
- 6 まとめ

という順番で書くこと。

注意

たとえ、あなたがこの文章の内容に共感していたとしても、あえて反論を考えて論じてほしい。あなたの意見ではなく、思考力、理解力、文章力を評価したい。

小学校段階では主体的な学習態度の育成を重視すべき

(出題者作成)

これからの小学校では、そこで学ぶ知識や技能が、生活の中でどう役に立つのか、その結びつきを意識させたり、あるいは学びや発見の楽しさを知ることを通じて、知的な好奇心を育てたりすることで、主体的な学習態度を育むことが何よりも重要である。

これまで（そして現在でも）日本の小学校では、基礎基本の重視がよく言われてきた。そこではしばしば漢字ドリルや計算ドリル、音読練習などで、読み書き計算の反復練習が、授業の中や宿題として行われてきた。しかし、本当に大事な基本とは主体的な学習態度の養成なのである。誰でも知っているように、勉強を面白いと感じている人は放っておいても勉強するし、勉強すればするほど成績もよくなり、また理解力も進むので勉強はいつそう面白くなる。

このような好循環を導くためにも、最初の段階で重視すべきなのは、勉強の面白さを感じさせ、それがいかに社会生活の中で重要な内容なのかということを実感として理解させることなのである。

単調な反復的作業を強制するのでは、勉強と生活を切り離して捉えるような見方を育てることにしかないし、学ぶ喜びなどは得られるはずもない。家庭学習においても、大事なのはどれだけの時間勉強するかではなく、主体的に勉強しているかどうかなのである。

PISA などの国際的な学力調査において、確かに日本は上位に位置しているが、理数科の勉強が好きかどうかに関しては、最低に近い結果となっている。こうした状況の弊害がもっともよく現れているのは、成人に対しての科学的リテラシーの国際調査の結果で、日本は先進国の中で、下から3番という結果となっている(2001「科学技術に関する意識調査」科学技術政策研究所)。

中高までの科学理解力が高いにもかかわらず、成人において科学リテラシーが低いのは、高校までの教育が、科学に対する関心を育てていないからだとも解釈可能だろう。¹ 勉強が勉強のためだけの自己目的化しているから、高校までの「勉強させられる」期間をすぎると、とたんに学ばなくなってしまうのである。

理数科だけでない。たとえば読書時間（活字を読む時間）についても世界最低クラスというデータがある。日本は韓国に次いで調査30カ国の中で下から2番目の位置であった（NOP World Culture Score(TM)）。

社会の変化のスピードが速くなるばかりの現代、学び続けることの重要性はかつてないほど高まっている。そのような社会において、初等教育でもっとも重視すべきなのは、主体的な学習態度の養成であり、そのためにも、勉強がいかに役に立ち、楽しいかということを感じさせることが何よりも重要なのである。

¹ ただし近年の国際調査（OECD 国際成人力調査 PIAAC2011-12）では、日本は読解力、数的思考力双方で1位になっており、知識を問うだけの科学リテラシーとは別の面では高い能力があることもわかっている。